

クローバー合唱会講演会記録

(小見出しは記録者による。文責：会員・高嶋正文)

開催日：2005 年 11 月 26 日 場所：東京外国語大学 本郷サテライト

「私と中国語」

榎本 英雄

はじめに

35 年中国語卒業の榎本です。お馴染みの方々ばかりで、改めてくわしくご紹介して頂くこともなかったのですが、クローバーでは学生の頃、よく合宿に行ったり、いろいろ活動には参加していました。卒業後は、もっぱら幹事さんのお世話を受けるばかりで、こういう会の時だけの参加となっています

今日は、幹事さんから何かしゃべれということなので、一応何をお話するか考えてはみましたが、日頃は大学で、学生たちに中国語を教えることが専門ですから、こうやって皆さんにお話しをする機会はめったにないことなので、いったい何をお話したらいいかと思い悩んでおります。というわけで、今日の話どういうことになるか、聞きにくい点もいろいろあると思いますが、お許し願いたいと思います。

お話ししたい三つの内容

今日の内容は、三つに分けてお話ししたいと思います。

一つ目は、私は中国語を高校の時に初めて学んだのですが、その中国語を始めた頃、それから外大で中国語を更に勉強して、今、教師の道に転身したわけですが、その過去を振り返って、お話ししたいと思います。

二つ目は、私は NHK テレビで 20 年間、最近 2 年間はラジオ講座も担当したのですが、中国語講座を担当しました。それに関連した幾つかの思い出話になると思いますが、メディア教育を体

験して感じたことをお話ししたいと思います。

三つ目は、中国語ってどんな言葉だろう？ということです。中国語を勉強している方は、殆どいらっしゃらないと思いますが、「えっ、そんなことがあるの？」と面白いと感じて頂けるようなことをお話してみたいと思います。

お話しに入る前に、最近の上海について

お話しに入る前に余談ですが、実は20日ほど前に上海に行って参りました。ここに写真が並んでいますが、その時撮った上海の写真です。

1年2ヶ月振りの上海行きでしたが、それというのも、1年2ヶ月前に上海で大変なことがありました。交通事故に遭い、一瞬意識不明になったという事件です。勤務先の大学の代表団で、北京、上海へ行き公務が終わった後、個人として上海に数日滞在の予定にし、その時には家内も上海にやって来ることにしました。その当日、浦東空港へ中国人の友達の自家用車で、上海へ来る家内を出迎えに行きました。そして市内に向かう高速道路で追突事故に遭ったのです。家内は顔を打ち、私は意識不明になり、気がついたら病院のベッドの上でした。救急車で病院に運ばれたのですが、病院はなかなか設備が整っており、ドクターは日本で教育を受け、日本語を話せました。検査の結果、脳に異常はないが、顎の骨が損傷を受けているということでした。72時間は安静にしないとイケないというわけです。旅行保険に入っており、費用の面は問題なかったのですが、一晚10万円もする病院で、4泊ほど入院しました。4日後東京の病院にドクター付き添いで移送され、その後2週間東京で入院しました。アゴの骨を折っていて、手術を行い、プレート(ギブス)をはめていたのですが、この3月にそれも取れて、今は全快しました。

(事故も保険会社ではなく、個人ベースの解決)

上海の高速道路は、片道4車線の凄い道路です。中国の友人の車をその雇っている社員が運転していたのですが、車の前に割り込みがあり、車の右サイドにぶつかり、こちらは急ブレーキを

かけたところ、後ろからトラックにぶつけられました。友人は無傷だったので、いろいろ事後処理ができたことが幸いでした。警察が来て、事故を調べましたが、相手側に 100%責任があると判定され、友人も弁護士を頼み、自分にも過失があるより、相手側に 100%過失があるほうが、保険求償に有利と考え、後でそのような警察の認定書を入手したのですが、実はこれが逆に災いの元になるのです。

相手側は安徽省の保険会社に参加していたのですが、まだまだ日本ほど自動車保険がきちんとしておらず、その保険会社は、運転手が加入の時に、何やら手続きに瑕疵があるということで、保険金は一銭も払えないと言うわけです。友人の方も、自分の保険会社からは、相手側に 100%責任があるから、金を払えないと言われ、両方から保険金が出なくなってしまったわけです。

友人は何ヶ月も放置されては困るので、弁護士に解決を依頼し、弁護士が相手の保険会社の担当者に 5 千元(7 万円)の袖の下を渡したところ、5 万元 (70 万円) の保険金が出ることになったというわけです。このように中国では、会社とではなく、個人ベースで話をつけるということが行われ、それを実際に体験して、さすがに中国だなあと思いました。中国は、我々の社会と違って、人と人との関係で物事が解決するということを耳にはしていましたが、図らずもそれを体験したというわけです。

(日に日に変わる上海、ビルブームが続く)

今度 1 年 2 ヶ月振りに上海を訪れ、事故を起こした高速道路を通り、この辺だなと思いながら市内に入りましたが、上海の変化は凄く、日に日に変わっているなあと思いました。1 年前に較べても変わっています。

或る記事によると、現在上海には 18 階建て以上のビルが、3000 棟以上あるそうです。市街地は狭く山手線の中くらいの広さで、今後、現在工事中と許可になっているものが、3000 棟あり、最後には 6000 棟になるそうです。今上海はビルブームで、今後それがバブル崩壊になるのかどうかですが、中国は奥深いところがあります。中国は土地が全て国の土地になっていて、マンションの売買は、使用权のみの売買で、土地はすべて国が所有し、個人所有はないので、そういうと

ころが影響しているのでしょうか、バブル崩壊は起こりえないだろうとのことでした。

また今回、嘗て共同研究をした復旦大学の先生を、その事故の見舞いのお礼を兼ねて訪問しましたが、なかなか立派なマンションに住んでおられました。

中国では、その昔住宅は全部社宅で、つまり会社の所有で、家賃は信じられないくらい安かったのですが、3 年ほど前、住宅改革の政策が出て、社宅は止めて、使用权を所有する個人の住宅に切り替え、住宅を販売するようになりました。彼のマンションも、大学のそばのマンション団地にあり、その団地は、日本では考えられない大規模な、10 数階の高層マンションが 30 棟くらいある団地でした。中国の住宅の状況は、昔と較べると本当に変わったなという感じがしました。

1. 一つ目の話： 中国語が生涯の仕事に

前置きが長くなりましたが、これから今日のお話の一つ目、私が高校時代に初めて接した中国語、それが生涯の仕事になったことについてお話をします。

（北園高校で中国語を勉強）

私は、板橋にある北園高校に 1952 年に入学しました。そこに中国語の講座があったのです。どうして高校に中国語の授業があったのか、その当時としては非常に珍しいことなのですが、校長先生が大変語学に関心があり、英語のほかに、中国語とドイツ語、フランス語を設けていました。その辺のいきさつについては、東大の中国語学教育で著名な倉石先生が「中国語 50 年」という本に書かれていますが、その当時の北園高校落合校長が、倉石先生のところに来て、何とか中国語の先生を派遣してくれないかと頼まれ、倉石先生が中国語の先生を派遣したというのが、そもそもの始まりのようです。1940 何年か戦後間もない頃、既に中国語の講座が開講されていたわけです。

私は入学した 1 年目は、ドイツ語を履修しました。そのほか語学が好きで、ロシア語などにも首を突っ込んだりしましたが、ドイツ語は 1 年で止めてしまい、2 年目になって中国語を始めました。特にこれと言った動機はなかったのですが、私は子供のころから書道をやっており、漢字に興味があったことも関係していたのでしょう。その時の中国語の先生は滝川先生で、後に麗

澤大学の教授になられ、結婚して小野沢先生と改姓された方ですが、発音が非常にきれいな先生でした。小野沢先生は、東京外大の最初の女子学生（昭和 25 年卒）と言われた方ですが、その当時、北園高校で中国語を教えておられたのです。

（メロディでアクセントを表す声調言語に出会う）

私は、中国語を履修してみると、どうも体質に合いそうだと感じました。なにが合いそうかという、やっぱり中国語の独特の音が自分の体質に合っていた。それと中国語のアクセントには四声と言われる、歌のようなメロディがあり、このメロディが自分の体にどんどん沁み込んで来ると感じたのです。

中国語は俗に発音が難しいと言われますが、難しいと感じる方は、多分そのメロディがうまく体に沁み込んで来ないのです。これは歌と同じで、音の上げ下げです。言語のアクセントにはストレスをどこに置くかと言う言語と、声調言語と言われるメロディでアクセントを表す二つの系統があります。中国語はメロディによるアクセントで、それがどうやら自分の体質に合っているという感じがしまして、勉強がスムーズに進んだようです。

その頃、中国語は世の中では注目されておらず、なんで中国語なんかやるのかといわれるくらいで、まして高校に講座があるのは、全国でも珍しく、東京では、日比谷高校、北園高校ほかで、3校だけだったそうです。2年生の時は、面白半分の学生もいて、沢山履修していましたが、3年生になると、かなりレベルが高くなり、本気でやる学生しか残りませんでした。授業のレベルは、多分私立大学の専門の学科としても2年生位の実力で、魯迅の小説などかなり難しいもの読んでいて、実力は相当ついていたと思います。

（中国語で外大を受験）

いよいよ3月卒業の時期を迎え、進路はどうしようかと思いましたが、在学時代は生徒会活動などに身を入れていたりして、ろくに勉強していなかったものですから、そのまま大学に行けそうもない、英語も中学、高校とやってはいるのですけれど、どうも十分な力がついていない。で

はどうするか、これから自分の生涯を決めなければいけないと思った時に、自分には中国語があるということに気づいて、中国語でなんとか入試が出来ないかと思いました。外語大は、中国語で外国語の受験が出来る、外大ならば、中国語を入学試験に活用できることを知りました。勿論2年位やっただけでは、大学受験にはだめなので、1年浪人して外語大に挑戦しようと思い、民間の中国語学校に通い力をつけ、翌年受験して、何とか中国語科に入学出来たわけです。

入学した時には、すでに3年程中国語をやっていて、相当実力がついていましたものですから、初めてやる人達とはレベルが違いましたが、それでもさぼらずに真面目に授業に出て、4年間更に続けて勉強したわけです。

外大入学試験の時の思いで話ですが、その時清水先生(主任教授)によるディクテーションの試験があり、今でも忘れられない思い出になっています。

先生は「ウオ ヅウオグウオ フェイチー」と発音しました。中国語をご存知ない方には分からないことですが、そう発音され、私は「我做过飞机。」(私は飛行機を作ったことがある)と書き取ったのです。ところが後で考えれば、或いは「我坐过飞机。」(私は飛行機に乗ったことがある)と発音されたのかも知れないと思ったのです。中国語では「作ったことがある」と「乗ったことがある」は発音が全く同じなのです。何の前提もなく、その表現だけを聞いたとすれば、おそらく「飛行機に乗ったことがある」のほうが普通で自然だとは思いますが、私は模型飛行機を作ったことがあり、私のように書き取ったとしても、あながち間違いではないのです。採点結果は知る由もありませんが、そんなことを未だに覚えています。中国語というのは、あとで色んな例を挙げてお話ししますが、その言葉がどういう場で話されたかということが、非常に大事な要素となる言葉なのです。

(就職後、学校へ戻り教学の道へ)

私は、卒業と同時に味の素株式会社に就職し、サラリーマンになりました。味の素には大学の先輩がたくさんいて、中国語要員として採用してくれたのですが、そこで10年間勤務し、サラリーマンの生活もそれなりに理解しました。7~8

年経った頃、1971 年ですが、国連で、アルバニアが、常任理事国の代表に台湾ではなくて、大陸の共産党政権(1949 年成立)を代表とすべきだという決議案を出して、それが可決され、大陸の中国が国際舞台に登場することになりました。そういう事実を見る一方、サラリーマンを 10 年やって余りぱっとしない思いもあって、私はもう一度中国語を見直したい、これからはきっと中国の時代が来るのではないかと思いました。それまでは中国語に対する関心が世間ではあまり強くなかったのですが、そういう時代になって、私は何とか中国語の道を模索出来ないものかと思い、無謀にも母校の長谷川教授に勉強し直したいと相談に行きました。卒業時には大学院がなかったのですが、その時には大学院が出来ていて、長谷川教授には「お前が今来ても、大学院には受からんぞ。」と冗談まじりに言われました。しかし先生は、私が学生の頃は良く出来たことを覚えていてくださり、私が本気でやる気なら考えてみようと言って、宿題を出してくださいました。それは、商業中国語の講師として 1 年間の授業を担当するに際し、授業内容をペイパーにして出してみなさいということでした。たまたま仕事で貿易の実務を体験していましたので、私は一方でサラリーマンの仕事を続けながら、その準備をしました。原稿用紙およそ 200 枚ほどの授業内容の原稿を作り提出したところ、教授会で非常勤講師として採用する許可を取って下さいました。アルバニアの提案による国連決議の 1 年後、私は味の素を退社し、幸いにも 1972 年 4 月から非常勤講師として外大に採用されました。外大の講師になると、他の大学でも非常勤として使ってもらえることになり、駒沢大学、国学院大学、明治学院大学等で仕事をさせて頂くことが出来ました。味の素よりは収入が大幅にダウンしましたが、精神的な面では充実した日々を過ごすことができました。

(米中、日中が国交回復へ)

そうこうしているうちに、中国との関係では、71 年、アメリカのニクソン大統領が中国へ飛んで、中国との道を開きました。アメリカに頭越しにされて、あわてた日本は、1972 年に田中角栄首相が中国に行き、日中共同声明に調印し、国交回復に漕ぎ着けました。

その頃から、中国語をやる環境は少しずつ整ってきて、大変幸運にも 74 年に明治学院大学に専

任講師として就職することが出来、生活も安定して来て、その後は、勉強にも打ち込むことが出来ました。外語大でもその後 15 年間講義を担当して来ました。

75 年に初めて中国へ行きました。その当時は、中国から招待状を貰い、ビザなど色々な手続きをしなければならず容易には行けない時代でした。ご存知かと思いますが、文化大革命は、66 年から 77 年まで続いた混乱期だったのですが、その末期に、或る中国語教育代表団に参加して中国へ行くことができました。上海なども今からは想像もできぬほど、夜の街は薄暗い感じでした。中国の人々は日本人を心から歓迎してくれ、我々も文革を心から賛美するといった時代でした。その文革も 77 年に終わりました。

（上海へ研究留学、上海語を研究）

79 年、大学で海外研究に派遣される順番が回って来まして、1 年半上海へ研究留学するチャンスが巡ってきました。中国へ行って、向こうで生活するのはもちろん初めてのことで、中国語を本格的に話すのも初めてでした。75 年に代表団で訪中した時は、通訳もついており、中国語を話す機会も少なかったのですが、この留学の時からが初めて中国語会話や、そのほかの様々な勉強が始まったと感じています。

私の留学は、それまでの文部省のお墨付きを貰って訪中する、学者の交流ではなくて、たまたま学術振興会の招きで日本に長期滞在していた復旦大学の学長の息子さんをずっとお世話していたことがご縁で、個人的に復旦大学学長の計らいで、留学することが出来たわけです。

向こうで生活を続けているうちに、2～3 ヶ月もすると、或る程度中国語会話も、行動も自由に出来るようになりました。今も思いますが、会話力は、読み書きをしっかりと勉強して力をつけることが大事で、読み書きの力があれば、必ず会話も自然に出来るようになると思っています。

上海に留学中は、主に上海語の研究をすること、共同研究の目標として上海語を学習する手順を作ること、また見聞を広めるため中国国内を出来るだけ旅行すること等でした。当時、上海語の領域は、やる人が少なかったので、上海語の本を作ってやろうという目的を持って、上海語を如何に記述するかに集中しました。そんな準備をして日本に戻ってから、白水社から上海語の本

を出版することが出来ました。

（上海語に愛着を持つ上海人）

さて、今回上海へ行って、びっくりしたのは、上海で上海語がだんだん使われなくなり、共通語が主流になっているということでした。上海の人口は、1600 万人に増え、外からの人がどんどん増えていて、その人達は上海語を話さない。国の政策で、共通語を使うということもあって、上海語が衰退しているのです。

そのことを非常に憂慮するという上海の新聞記事を読んで、私は非常にびっくりしました。日本では、青森弁や九州弁の衰退を誰も不思議に思わないし、嘆く人はいませんが、いま上海では、「上海語を盛り返せ」という運動が起っています。国会議員も上海語をもっと大々的にやらなければいけないと言い、上海語の学校まで作っているほどです。上海人は、上海語に対しての愛着と誇りが強く、捨て難いものがあるようです。しかし、時代の流れとしては、上海語はいずれ弱体化あるいは消滅の方向にあると言っているのではないかと思います。

自慢話になりますが、私の作った本も、過去 10 年間、結構よく売れており、内容的にもある意味で基準となる部分もあったと思っています。特にローマ字表記法などは、他の本でも利用されています。しかし今回改めて、上海語の衰退という時代になったのだということを実感した次第です。

話を戻しますが、その当時の中国は、やはりのどかな時代だったと思います。またとないチャンスですから、見聞を広める為にできるだけ国内旅行を心がけました。当時外国人が中国国内を旅行する際には、旅行許可証というものが必要でした。また、食糧の配給切符が必要で、「糧票」と言いますが、これは各地に、その土地にのみ通用する穀類の配給切符が発行されているのですが、旅行するには、全国に通用する切符を大学から貰って行きました。そうでないと、食堂にも入れないという時代でした。中国側は、食糧を無駄なく管理するための便法だと説明していましたが、実は人の移動を制限するためでもあったようです。今は人の移動は自由ですが、それでも戸籍の移動は制限されています。戸籍がなければ、その地での自分の存在が証明出来ず、就学や

社会生活に不便ですので、戸籍の面で人の移動は依然として管理されているわけです。しかし、内陸の人々は、上海などの大都会に来て、定住して、何とか戸籍を手にしたと考えているようです。

上海での留学生活は、1年半で終り、81年3月に日本へ戻りました。

(帰国後、NHKの中国語講座を担当)

上海から戻って暫くした時、当時NHK中国語講座を担当していた外大の輿水先生(主任教授)から、中国の新しい状況を聞きたいからと言われ、研究室にうかがいました。そこにNHKのテレビ講座のディレクター3人が来ていて、上海生活の体験をお話しました。あとから思えば、それは中国語講座講師のオーディションみたいなものだったのかもしれませんが。3週間ほどしましたら、NHKから講座の担当をお願いしたいという話がまいりました。不安を感じつつもまたとない機会であり、思い切って担当を引き受ける決断をしました。

81年10月から中国語講座の担当をするようになり、01年3月まで続いたので、まるまる20年間続けました。語学講座では多分前例がないほどの長期間で、自分でもよくやったと思っています。視聴者の反応が悪ければ、下ろされますので、反応は良かったのだと思っています。再放送がありますが、半年分位の番組を毎年新作しましたので、その経験が私のなかで大きな蓄えとなっています。

2. 二つ目の話：メディア教育を体験して

2番目のお話として、テレビとラジオの講座を担当し、その体験から感じたことをお話しします。

(NHK語学講座の影響)

NHKで、英語のラジオ講座はかなり前からありましたが、フランス語、ドイツ語、中国語の講座が始まったのは1952年からで、今から53年前のことです。78年に中国との平和条約が出来た

訳ですから、その 26 年も前にラジオの講座が始まっていますから、NHK が公共放送として語学教育に打ち込むその考え方の普遍性はやはり凄いなと思います。

テレビの講座が始まったのは、ラジオ講座開始から 15 年後の 67 年です。ですから、開始から 38 年になりますが、私はその半分ほどにかかわったことになります。最初は 1 回 30 分、週 3 回、再放送を含めて、週 3 時間ありました。現在は、25 分番組で週 1 回、再放送を含めて、週 50 分となりました。NHK は他にやることが一杯ありますから、それでも 50 分を中国語に割くということとは、考えようによっては、世界でも稀にみる放送局だと言っていいでしょう。中国語講座を勉強することによって、中国に興味を持って、そこから中国語をマスターした人は沢山いると思います。視聴率は平均して 1 % ですから、100 万人位は見ており、相当の影響力があつただろうと思います。

ラジオの方は、週 6 回各 20 分、再放送 20 分で、あまり変わらなかったと思います。

(テレビ、ラジオ放送と教室との違い)

テレビとラジオのやり方は当然違いますし、またメディアとしての機能も全く違います。

ラジオの方は、どちらかと言うと、勉強をちゃんとやる。テレビの方は、学習者の裾野を広げること为目标とし、楽しくやるということを目指したわけです。テレビとラジオは一体どう違うかということが、これからお話ししたいことになるわけですが、いずれにしても教室の授業と全く違うということは当然です。

テレビとラジオは一方通行で、学生の反応は帰って来ません。また、講座を担当する側から言うと、無防備、丸裸でやっているようなものなのです。つまり、どんな高名な専門家が見ているか聴いているか分かりません。教室の場合は、何を言っても咎められることもなく、極端な話、ミスや間違いをしても、先週こう言ったけれど、あれは間違いだったから直してくださいと翌週の授業で訂正することが出来ます。それに対し、テレビ、ラジオは訂正が一切効きません。テキストの誤植はまれにありますが、これは次号で訂正出来ます。放送の場合は、テレビでもラジオでも、言ってしまったことにもし間違いがあれば、大問題になります。訂正版を次の週でやった

ところで、それを全てのひとが見るとはかぎりません。つまり間違いは絶対許されないのです。よく放送の中で、先ほどは間違いでした、お詫びして訂正いたしますと言うことはよくありますし、番組の中での訂正は可能ですが、次の番組での訂正は許されないのです。これはやはり相当に緊張することです。もちろん講座番組は録画ですから、間違えればその場で直せるのですが、ミスに気づかないということが、恐ろしいことなのです。そういうことが、まず教室との違いとしてあります。

（テレビとラジオの違い）

テレビとラジオの二つの場を考えた時に、テレビは映像と音声の両方があり、ラジオは音声だけです。言葉は必ず話の場があって発せられるわけですから、テレビのように映像と音声の二つがある場合には、例えばお茶を飲む場面ならそれが映像で示されますから、誰にでも分かります。ところがラジオの場合は、どういう場面かは効果音や説明で示されたとしても、聞く人の想像でそれぞれ勝手に頭の中に描かれます。つまり、場の捉え方は、テレビは百人一様で、ラジオの方は百人百様だということです。そういう中で、言葉を扱って行くということは、実は根本的に違いがあるというわけなのです。

特に中国語は、三つ目のテーマでお話ししますが、「話の場」ということが非常に重要なのです。例えば、「食べる」は「チー（吃）」ですが、「食べる」という動詞は、場面によっては「食べろ」という命令の表現になります。中国語には命令形という語形がないので、ここでは「食べます。」なのか「食べなさい。」なのかは、その話の場が決めるわけです。お料理が前にあり、お客が言えば「私は食べます。」なのですが、主人側が言えば「あなた食べなさい。」になるわけです。中国語には、場面によって意味が全然違ってくるといって、独特な表現の世界が有るのです。その意味で、テレビの場合は、映像が場を強く補っているので問題が起こらない場合も、ラジオの場合は、場面が事実上示されないだけに、その部分を言葉できちんと説明しないと確実に伝わらないことも、あり得ないことではないのです。

（映像で場面があっても、なお二つの意味に）

さて、ある日のテレビ収録の時に、これが逆の落とし穴になって、つまり場が明確に示されていることで、却って大失敗となってしまったことがあり、未だに忘れられないことがあります。

中国語をやっていらっしゃる方には、分かりにくいと思いますが、「あなたは忙しいでしょう」（ニー マン バく你忙吧>）という表現があります。ここで使われている「～でしょう」（バく吧>）という推量の助詞を、幾つかの例文を挙げ、それを番組の中で演じられた場面を通して、説明するわけですが、テキストは１ヶ月前に発売されていて、説明の内容はとっくに決められています。それに基づき事前に打ち合わせをし、ディレクターが映像を撮り始め、段取りよくやるのですが、その時は、収録した講座の試写を見て驚いたのです。実は、私が説明していることと、映像の中で演じられていることが全然違うことが分かったのです。

私は、「～でしょう」という推量の気持ちを表す例文として「あなたはお忙しいでしょう」と解説をしたわけですが、収録された場面では、仕事をしている人のところへお茶をサービスしながら、同じ表現を言うのですが、その場面では、この表現が「どうぞ仕事をお続け下さい」という意味になってしまうのです。実はこの表現は「どうぞお続け下さい」という場面と、「お忙しいでしょう」という場面の、どちらにも有効な表現であったわけです。

テキストでは最初から「お忙しいでしょう」と言う意味で作ってありますから、私はその通り解説しているわけですが、スタジオでそれを演じる中国人ゲストが、その表現を「お仕事お続け下さい」という意味に受け取って演じてしまったので、話が合わなくなってしまったわけです。スタジオはもう撤収しており、撮り直しは出来ず、どうしようか討論したのですが、多少問題はあるがこのまま放送しようということになりました。お茶を持ってきながら明らかに「どうぞお続け下さい」と言っているのですが、「お忙しいでしょう」と受け取れないこともないだろうということにして、そのまま放送したわけです。視聴者からは幸い意見もなく、無事に済みましたが、未だに思い出す事件でした。

（中国語は活用がなく、場面により意味が違う）

中国語はこのように一つの言葉が、話す場面で異なる意味になることが結構多いのです。それはつまり、中国語は、言葉に現れない話の場というものが、非常に重要だということなのです。これは中国語の特徴として、三つ目にお話しする中にあるのですが、中国語は、いわゆる孤立語と言われる言語で、漢字で表記されるとか色々な特徴があるのですが、その特徴の一つに屈折がない、つまり語形変化がまったくないということがあります。人称による動詞などの語形変化、時制変化などないということは、それだけ言葉に「タガ」がはまっていない訳ですから、いくつかの意味に取れてしまうということにもなるのです。

例えば一つ例を挙げれば、「ビィエ クァーチ（別客气）」という言葉があります。直訳すれば「どうぞお客の気持ちにならないで下さい」という意味ですが、客側が主人側に向かって言った時は「どうぞお構いなく」であり、主人側が客側に言った場合は「どうぞご遠慮なく」という意味になり、客が言ったか、主人が言ったかで日本語では訳が変わります。「他人行儀にしないで下さい」というのが元の意味なので、お客が言うことも、主人が言うこともできるわけです。中国語はこういうことが結構多いのです。

これらは、テレビとラジオという異なるメディアを使った時に、相当神経を使わなければいけないことを意味します。私は、最後にラジオ講座を担当したのですが、ラジオの方は、あまり神経を使わずに、映像で示されない分、ひたすら言葉を使って説明すればよいのですが、テレビの方は映像の助けによって、無駄な言葉は省くのが原則ですから、映像が補っている部分、言葉をはしょって、はじめて生きた言葉になるのです。主語、述語、目的語が全て揃っている言葉が必ずしも生きた言葉にはならないのです。そういうところにテレビとラジオの違いがあると思います。荒っぽい言い方をすれば、ラジオの方は只ひたすらしゃべる、テレビの方は映像に補ってもらうので、言葉をできるだけはしょるという差がありそうです。

ラジオでも、教室のようにインタラクティブでなく、学生の反応が見えないので、一方的に話さなければならず、また同様に間違いは許されません。私は最後にラジオ講座を担当しましたが、両方を体験できたことで、とてもよい経験になったと思っています。

3. 三つ目の話：中国語ってどんな言葉だろう？

私は、中国語を学生に説明する時、三つのキーワードを用意しています。

先ず一つ目は、中国語は世界で最も進化した言葉だということ。

二つ目は、世界で最も贅肉がない、スリムな言葉だということ。

三つ目は、中国語を勉強すると、世界の言語のすべてを体験することが出来るということです。

(1. 最も進化した言葉)

一つ目の中国語は最も進化した言葉だということですが、世界の言葉をその構造から分類すると、

屈折語——ドイツ語やロシア語などいわゆる語形変化をする言語で、主格や目的格、時制などなど、さまざまに語形変化をします。

膠着語——日本語のように後ろに文法的機能を表す言葉をつけるもので、「私は」とか「私を」のように助詞とか、助動詞などをくっつけ、糊付けして行きます。

孤立語——中国語が孤立語ですが、孤立語は語形変化が一切しない(くっつけるものは幾つかあるにはあるのですが)基本的には言葉の並べ方で意味が決まります。従って言葉の並べ方が重要です。

英語は屈折語に分類されますが、実は屈折語尾をどんどん捨て去って来ています。私は英語の専門ではありませんが、調べてみますと、7世紀から11世紀頃は、屈折語尾が相当にすごかったようです。人称代名詞に単数と複数がありますが、それぞれに四つの「格」(私は、私の、私に、私をなどの「格」)があったそうです。その後、英語は歴史の波にもまれどんどん語形変化を捨て進化して来ています。

屈折語尾がないということは、言葉の並べ方が重要になって来ます。中国語は語形変化がないので、語順が重要です。

英語もこれまでに屈折語尾を殆ど捨て去り、進化して来ていますので、中国語のように単語の並べ方が重要になってきています。この意味で英語は明らかに中国語に近づいて来ていると言えます。つまり中国語は初めから、英語の進化の方向に居たということになると思います。故に中国語はもっとも進化した言葉だということになるわけです。

（２．スリムな言葉）

二つ目は、中国語はスリムな言葉ということです。

何度も言うように、中国語には時制がない。従って過去形がありません。例えば、中国語で「你在哪儿?」「ニー ツァイ ナァール」（あなたはどこにいますか）の「在」（いる）は過去でも、現在でも、未来でも全然変わりません。昨日の話をしていれば、「どこにいたのか」になり、今日や明日の話をしていれば、「どこにいるのか」になる。これは、「話の場」が決めている。どんな言葉にも必ず話の場があり、「場」のない言葉はないからです。

中国語では、このように昨日の話をしていれば、「いた」になり、明日の話をしていれば、「いる」になる。その意味では昨日の話をしているか、明日の話をしているかが重要であって、他の言語にあるように過去形や未来形でそれを示す必要はありません。その分無駄がないということです。外国人にとっては時制変化をいちいち覚えなくてよいことになり、学習者にとっては実に親切な言葉だというわけです。大事なのは話の場だということなのです。

また、彼と彼女の区別也没有ありません。中国語には、彼と彼女の区別を表す単語はなく、どちらも「他」（タァー）です。（ただし、文章では「他」と「她」と書き分けます）どんな言語でも、多分ヨーロッパの言語でしたら、彼と彼女を表す単語が別々にあって、しかもそれぞれ動詞の形も違うということがあるわけですが、中国語は「他」の一つだけで、彼と彼女の両方を表しています。これで問題はないのか気になります。

しかし彼と彼女という二つの単語を必要とする場面とは一体どういう場面か考えてみても、ほとんど思いつくことはないのではないかと思います。つまり、代名詞によってある特定の人物

を指すということは、話し手も聞き手も、それがどの人物を指すか分かっているから使えるわけです。それはまた、その人物が男であるか、女であるかもとうに分かっており、「彼」と「彼女」の2つの仕組みを用意しなくても全く問題はないということなのです。そのような人物が、同時に2人3人いるということが有ったとしても、それはこれとは別の問題です。

それから、先ほどの「お構いなく」「ご遠慮なく」もそうですし、あと例えば「私は、あなたに見せてあげる」(我給你看看。ウオー ゲイ ニー カンカン)という言葉がありますが、その同じ言葉が、「私はあなたの為に見てあげる」という意味にもなります。「見せてあげる」と「見てあげる」は動作が全く逆になりますが、場がそれを補う故に、中国語は一つの表現で済んでしまうのです。

「見せてあげる」なのか、「見てあげる」なのかは、その時点で話し手も、また聞き手もはっきり分かっています。ですから、1つの同じ表現で何も不便は起こらないのです。

それから、受身と使役の文も中国語では一つの表現です。「彼に殴られた」と「彼に殴らせた」というのが、同じ表現になる可能性があります。「殴られた」は、殴るのは彼で、「殴らせた」も、殴るのは彼です。それを「させた」と表現するか、「られた」と表現するかは、その時にどういう発話の意図であるかが違うだけで、事実是一个なのです。ですから、使役も受身も中国語は一つの表現で済む訳なのです。

中国語は、その言葉を話した場がどう成り立っているかが問題なのですが、それは、話し手と聞き手との間の、言わば当然の了解事項です。中国語に限らず言葉は話し手と聞き手との間に共通の場が有ることが当然の前提ですが、中国語はそれを語形変化など言葉に反映させて、なぞることはしないということです。話の場を土台として成り立つという特徴が中国語にはあるわけです。

例えばドイツ語などは、主語や目的語の区別が語形によってはっきりしており、語順がどうで

あろうと、文の読み間違いが起こることはありません。まるで法律の言葉のように、誰が読んでも同じ意味にしか取れない、違う読み方が出来ない。それは二重にも三重にも「タガ」が嵌められていて、間違いようのないように組み立てられているからです。それが正に屈折語の特徴だと思います。

中国語というのは、話す人と聞く人の間に共通の場があって、はじめて言葉が通じる。言葉には現れない場に頼るということがあって、それによって言葉の意味が成り立っているということです。

ですからお互いに常識のない人間同士では、中国語は通じない（会場笑い）と言ってもよいと思います。思いが一致してない者同志では、言葉が通じない。言葉というものは、本来そういうものだと思います。

また、もう一つの例を挙げれば、「了」（ラ）という単語、これは「・・・した」と言う意味の助詞ですが、これも場面によって意味が違います。私が、グラスにビールを注いで、「喝」（ホァー＝飲む）に「了」をつけて、「我喝了。」（ウオ・ホァー・ラ）と言いますと、「私はビールを飲みます」になります。それから飲み終わって、「我喝了。」（ウオ・ホァー・ラ）と言いますと、「私は飲み終わりました。飲みました」ということになります。「飲みます」というのと「飲みました」という表現が実は一つなのです。「了」には、動作完了の意味と、そういう状況の発生という二つのはたらきがあるからで、つまりこの場合、「飲んだ」という完了と、「飲みます」という状況発生との二つがあるわけです。

一体どちらの意味に取ればいいのかと言うことですが、分かり易く言えば、なみなみとグラスにビールが入っていれば、「飲みますよ」ということになり、飲み終わってグラスが空になっていれば、「飲みましたよ」になるのです。このように中国語では、グラスにビールが一杯か、空かが、その場の話し手と聞き手には分かっていることが前提になっているということです。

これがラジオで、単に「喝了」とだけ言いますとあるいはどちらの意味か分からないかも知れません。もちろんその言葉の前には、当然ながしかの話の場面が有るわけで、普通は問題が起

こることはないでしょうが。

そのほかにも、カメラを持って「照（チアオ＝撮る）了（ラ）」と言えば、「撮りますよ」になり、撮ったあとでは、「撮りましたよ」になります。その言葉が話された場面が、どういう場面だったのかということが非常に重要だというのが中国語の一つの大きな特徴です。それは先ほど話しましたように、大げさに言えば、話し手と聞き手との間に共通の認識がないと言葉が通じないということにもなって、なるほど面白い言葉だなということが言えると思うわけです。

中国語は、このように過去形がないとか、命令形がないとか、「する」「した」が同じ表現だとか、その他いろいろ、つまりよくよく考えてみれば無駄なものは殆どない。話の場によって示されているものは、言葉に反映させなくていい。出来るだけ言葉はスリムにして、贅肉を取って、それらの役割は、話し手と聞き手が共通に持っている話の場に委ねることが特徴としてあると言えるわけです。

（3. 中国語を学んで、世界の文化や思想が育まれた土壌を知る）

三つ目は、象徴的な意味ですが、世界の言語がすべて分かるということです。

先ほどお話ししましたが、英語は、屈折語尾を今はほとんど捨て去ってしまい、語順が文法の重要部分を占めている中国語に近づいていますけれど、もともとの形態類型は屈折語です。私たちは英語を中学から学んでいます。

そして日本語は、膠着語です。ですから私たち日本人は、日本語と英語、つまり膠着語と屈折語は既になじみの言語です。あと残る未体験の言語は孤立語です。孤立語は何かというと、中国語ですから、中国語をやれば、世界の三つの言語の形態類型を全て体験出来るという事になるわけです。

言語とは、人間の思考の基本にあるものです。世界には様々な文化や思想がありますが、それは全てそれぞれの言語を土台として成り立っています。孤立語の物の考え方、屈折語の物の考え方、或いは膠着語の物の考え方、論理等々、それぞれには当然それぞれの特徴があると思います。仮にそれらを多少とも見つめることができれば、いろいろ面白いものが見えてくるのではないかと

と思うのです。

繰り返しになりますが、日本語は勿論わたしたちの母国語ですから、膠着語については相当ベテランであり、英語については、中学、高校、大学とやっており、ましてフランス語、ドイツ語をやれば、屈折語について相当に理解が深まるものと思います。残るは中国語、中国語を学ぶことによって、孤立語に初めて接する訳です。孤立語に接することによって、いささか大げさな話ですが、世界の全ての文化や思想の根底に目を向けるスタートラインにつくことができるのではないかということなのです。日本人の私たちが中国語を学ぶということは、ただ言葉としての中国語をマスターするだけではなく、世界の文化や思想を育んだ土壌を理解するということに結びつく夢が隠されているということです。中国語学習のすすめということになりますが、ぜひそんなこともお考え頂ければと思います。

中国語のすすめを最後の一言とし、あれこれ入り混り整理不足のお話で誠に恐縮でしたが、そろそろ時間ですので、この辺で終わらせて頂きます。